

子宮がん検診（神奈川方式）

動 向

神奈川方式による子宮がん検診は、昭和44年より神奈川県産科婦人科医会との協力事業として、県下の医会会員医療機関から郵便により送付されてくる細胞、組織材料について検鏡・判定を行ない、その結果を医療機関に返送しているシステムである。通常日母方式と呼ばれている。

前頁の車検診が行政主導で行われているのに対して、神奈川方式は産科婦人科医会会員主導で行われており、両者相補って本県の子宮がん検診の骨格をなすものである。

検査数、受診者数とも近年減少を続けていたが、12年度は増加に転じた。しかし、本表には表示していないが、検体送付医療機関は減少しており、今後の課題である。

精度管理については、当該医療機関の協力により、精密検査対象者についての追跡調査が当協会の情報処理部により行われ、県産科婦人科医会のご協力により年1回の報告会を開催している。

方 法

神奈川方式子宮がん検診は県産科婦人科医会との協力事業としてスタートした。従って実施方法については昭和53年に日母がん対策委員会がまとめた子宮がん検診の標準化（日母方式）への答申によっている。従って対象婦人の年齢は一応30歳以上としながら既婚婦人ではその限りではない。がん検診のみを目的として受診した婦人についても通常の婦人科的診察を行うこと、コルポスコープを初回から細胞診と併用して使用することが奨められている。

細胞採取方法も子宮腔部と頸管の2ヶ処から別々に採取・塗抹することが定着している。採取器具も最近では綿棒に代ってサイトピックが採用されている。

体がん検診は頸がん検診受診者の内、年齢50歳以上のもの、閉経以後のもので問診で不正性器出血を訴えたことのあるものを中心に内膜細胞診を行っているが、細胞採取法はエンドサイト法、吸引法、ブラシ法などが用いられていて統一性はない。

子宮頸がん検診

平成12年度の子宮頸がん検診受診者は26,355名であった。がん確定者は91名（発見率0.35%）、内訳は頸がん83名、体がん1名、その他がん1名、再発転移がん6名であった。その他のがん1名の内訳は卵巣がん、再発・転移がんの内訳は頸がん再発2名、体がん再発3名、卵巣がん再発1名であった。

年齢階級別頸がん確定数では、29歳以下3名、30歳代36名、40歳代13名、50歳代19名、60歳代7名、70歳以上13名であった。29歳以下と30歳代の受診者数が9,129名、がん確定数39名（発見率0.43%）に対し、40歳以上の受診者数は17,226名、がん確定数52名（発見率0.30%）であって、総受診者数の34.6%である30歳代以下の層で高い確定率がみられた。又30歳代以下で発見された頸がんの病期が、38例中O期28名、I a期3名、I b期5名、II期以上2名に対し、40歳以上では52症例中O期17名、I a期0名、I b期1名、II期以上20名であって、高齢者ほど進行がんでの発見が多い傾向がみられた。又頸部腺がんが30歳代で1名、40歳代で2名、50歳代で2名、60歳代で1名、70歳代で1名発見され増加の傾向がみられた。（平成11年度は3名）検診の精度管理面では要精検率1.6%、陽性反応的中度21.3%であった。

子宮体がん検診

平成12年度の体がん検診受診者数は7,377名、頸がん検診受診者の28.0%であった。がん確定者は33名（発見率0.45%）で平成10年度以降、受診者数、確定者数とも漸増傾向にある。内訳は子宮体がん28名、その他の悪性腫瘍5名であって、子宮頸部がん3名、膵臓がん1名、平滑筋肉腫1名が含まれていた。内膜増殖症確定者は18名（発見率0.24%）、年齢階級別体がん並びに内膜増殖確定数は、29歳以下0-0名、30歳代1-0名、40歳代8-9名、50歳代19-9名、60歳代3-0名、70歳代2-0名であった。発見された体がん27例の病期は、O期2名、I期19例、II期以上5名、病期不詳2名であった。

関係の集計表は119～121頁に掲載